

特別企画 名誉会員インタビュー

日本放射線技術学会名誉会員 川上壽昭先生

日 時：2010年5月21日(金) 愛媛県総合保健協会 会議室にて収録

Interviewer：日本放射線技術学会前編集委員長 大塚昭義

日本放射線技術学会編集委員 西原貞光(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)

2010年5月21日、前編集委員長の大塚昭義先生と、編集委員である高橋康幸先生、私の3名で川上先生が働いていらっしゃる愛媛県総合保健協会を訪ねました。元編集委員の大石茂雄先生が連れて行ってくれた建物8階にある会議室では、川上先生がすでにお待ちになっていました。

はじめに

大塚昭義先生(以下、大塚)と西原貞光(以下、西原)：今日は、お忙しいところお時間を作っていただき、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

川上壽昭先生(以下、川上)：よろしくお願いいたします。

西原：突然ですが、先生はどのようなきっかけで技師におなりになったのでしょうか。

川上：生まれは出雲なんですが、小・中・高と一緒で、家も近所の幼な友達がいました。確か高校二年生の夏休みの頃だったろうと思いますが、二人で「出雲は医者が少ないからあそこで開業したら儲かるぞ」と他愛もない夢を語りあったのがきっかけで、彼は医学部に、私は技師学校に進むことになりました。技師学校を卒業した後、地元の出雲に戻って、島根県立中央病院に就職しました。1960年(昭和35年)のことです。

1. 学会活動を始めたのは(キーワード：環境)

西原：1960年というと、ちょうど50年前ですね。では、学会活動を始められたきっかけは、どのようなことだったのでしょうか。

川上：当時の放射線科長は、上坂松三先生でした。放射線科長というのは、現在の技師長と同じです。上坂先生は島根県技師会長であると同時に、日本放射線技術学会島根県支部の支部長をなさっていました。

当時は、今みたいに情報が得られない時代でしたから、技師会が何なのか、技術学会は何か、分からない状況でした。上坂先生の勧めで学会に入ったのが、学会活動の発端です。勧めとはいっても、実際は半ば強制だったように思います。だから、就職したところの上司や環境によって、自分がどのような方向に進むのかが決まってしまうという感じです。



そのとき、中国・四国部会の準備委員を経験することができました。学会に対する当時の印象として、学会開催の大変さと発表する会員の方々の姿勢に感心ばかりしていました。

そのうち、上坂先生が京都に戻られるということで、1964年(昭和39年)、京都大学医学部附属病院(以下、京大)に転勤することになりました。京大では、野原君(野原弘基先生)と小室君(小室裕再先生)が同期であったり、仕事や学術研究面では山田勝彦先生と同級であった平井昭一先輩に指導を受けたり、また、放射線科の助教授だった小野山靖人先生には、話の仕方から文章の書き方まで逐一指導と教育を受け、大変恵まれた環境にありました。

そして、当時の学会事務局は京大の放射線医学教室の一室にありましたから、学会誌の袋詰めや梱包、発送など随分と手伝いをさせられました。

西原：就職して、すぐに学会の裏方をいろいろ経験なさったということですか。

川上：島根での準備委員や、京大に行ってから若いときのこれら事務局の経験が、後から役立ったと感じています。さっきも申し上げましたように、学生時代の友達、就職してからの環境に左右されます。したがって、就職した先の先輩や上司、そして同僚が学会とか学術研究に興味を持たせ、指導してくれるか、やはり環境なんだろうと思います。

2. 仕事や学会活動で最も着目してこられたことは？

西原：仕事あるいは学会活動で、先生が着目してこられたことは何でしょう。

川上：1975年(昭和50年)、新設医科大学一期校として創設された愛媛大学医学部附属病院に転勤することになりました。そのときに決めていたことは、技師全員を学会に仲間入りさせることでした。理由は、大塚昭義先生と砂屋敷忠先生の励ましでした。

転勤して間もなく、大塚先生から「一緒に頑張りましょう」と電話をいただき、そして、暫くして砂屋敷先生が奥さまと一緒に訪ねてくださり「新設の一期校として、大変でしょうけど、後に続く者がおりますから頑張ってください」と励ましの言葉をかけてくださいました。先輩お二人からの温かい励ましの言葉に支えられて、何とか今まで頑張ってきたものと改めて感謝いたしております。

大塚：先生は新設大学の技師長として、新人たちの教育も大変だったと思いますが、何か工夫されたことがあったら教えてください。

川上：若い技師(仲間)ばかりですから、日頃の生活のことも親身になって聞いてやること。そして、仕事も研究活動も一緒にやってやることだろうと思っています。

更に、新設の大学病院は地域医療に貢献するために設立されたものですから、地域における放射線技術の向上に向けて、大学病院の設備を開放して一緒に実験するようなこともしていました。それが、大学病院の役目だろうと考えていましたから。

大塚：それは画期的なことですね。トップ(技師長)でないと決断できないことです。上司が大学の設備を国有財産だといって外部の使用制限をしたら、それで終わりですから。また機器が壊れたときには困りますよね。

川上：先生のおっしゃる通りです。壊したら大変困ります。だから、側について一緒になってやっていました。一緒でしたら、万一壊れたときも直ぐに対応することができますから。

それから、暫くして大塚先生から内田ゼミに参加しないかとのお誘いを受け、実験途中の「胃がん検診のROC評価」を持って参加しましたが、3時間の持ち時間と内田先生の厳しい言葉には身の縮まる思いでした。と同時に学術研究の原点を思い知らされました。

その後、内田ゼミと同じような形で、大塚先生が山口ゼミ(現在、大塚ゼミ)を始めてくださったので、仲間を連れて参加することにしました。それからは、「学会の原点は大塚ゼミにある」と、声を大にして多くの仲間を誘うようになりましたが、私のなかで学会活動の原点は内田ゼミであり、大塚ゼミにあると今でも強く思っています。



3. 組織検討委員長・総務理事・学会長としてのお仕事(学会組織の近代化)

西原：先生は80年代末、組織検討委員長に就任されましたが、その頃の学会の状況と一番検討なさったことはどんなことでしょうか。

川上：当時は部会選出理事という制度があって、1986年(昭和61年)に中国・四国部会選出理事に選出されました。後から考えてみますと砂屋敷先生(広島大学)と藤田一彦先生(徳島大学)の画策だったようです。第1回理事会に出席したとき、当時の山田勝彦総務理事から「代々、中四国部会の選出理事は組織検討委員会を担当してきたから、組織検討委員会の委員長をやってください」との命を受けました。

委員長を引き受けたときに抱えていた大きな課題は、広域支部化への推進でした。これは、従来の各県単位の支部制を廃止し、全国を8ブロック(北海道、東北、関東、東京、中部、近畿、中国・四国、九州)にするというものです。

当時は各支部、つまり県技師会が会費を集めていた関係で、技師以外の人が入会しにくい状況でした。したがって会費を本部直納制にするのが第一だったようです。前任の砂屋敷先生が会費直納制の基盤を作ってくださいましたので、各支部の一番の役割であったお金集めとか、送金などの業務をなくすことができいました。そしたら、その時間を学術研究活動に向けていただいたらという発想になります。

また、技師会と技術学会とは当然役目が違うということ。つまり技師会は職能団体であり、技術学会は学術団体ですから、学会は当然学術団体の機能を果たそうということになります。でも、これは本部の理屈であって、地方では技師会と役員も構成員も一緒。何の障害もなく、運営も一緒にやってきましたから、あえて分離(明確に)する必要がなかったのです。これまでの流れを変えようということですから、強い抵抗がありました。本部が考えるほど、甘くなかったの

です。したがって、学会本部の理屈を理解してもらうことは困難を極めました。各部会の開催時に学会長と一緒に説明に伺ったり、理事会に併せて支部長会議も開催して理解を求めてきました。

支部のあり方については、1942年(昭和17年)の学会創立当時から議論されてきたことでもあり、一朝一夕に解決できる問題ではありませんでした。しかし、1992年(平成4年)、九州支部を最後に理解が得られることになり、全国を8部会とすることができました。

この全国8部会の発足に伴いまして、本学会の学術研究の柱でありました画像部会と計測部会の名称変更が当然のように議論されることになりました。これまで出されていた学会将来構想では、画像と計測という二つの部会が、放射線技術に関する研究分野の二本柱であるとしていました。そして、この両部会を縦の柱として各分科会を横に置くという縦横の関係にありましたから、学術部会と地方部会として割り切ることもできたかもしれません。しかし、会員にとってより理解してもらうことを考慮して、学術研究の柱となる画像、計測両部会の位置関係と理念は決して失うことなく、分科会名称に統一することにしました。

もう一つの課題は、学会業務(委員会業務)の拡大と煩雑化に対応するために、諸規定や諸規約の見直しを行うことでした。これも、また大変な作業でしたが一つの考え方として、これからの学会運営には企業的な発想も必要だろうとの判断から、四宮恵次先生を中心に各委員会の業務内容の明文化と併せて、会務全般を統括する学会長と春秋の学術大会を主催する大会長制度の確立を行いました。

大塚：先生は組織検討委員長として大任を果たされた後、間をおかず総務理事・学会長へ就任され、大変ご苦労されたと伺っております。その間のお話をお聞かせください。

川上：1994年(平成6年)、野原先生が学会長にご就任されたとき「総務理事として手伝ってくれ」との話から「一年間だけなら」との約束で総務理事を引き受けることになりました。ところが、第1回理事会の開催時に隣に座っていた野原学会長が突然に倒れるというアクシデントが発生し、不運にして学会長代行を務めることになりました。ちなみに、定款では「総務理事は会長を補佐し、会長の事故あるとき、または欠けたときはその職務を代行する」(第4章第16条2項において)とありますから、否が応でも学会長代行を務めなければなりませんでした。そして、1995年(平成7年)、野原先生が健康に自信を持ってないとのことで学会長を辞退されることになり、結局、代行のときも含めて5年間も学会運営に携わることになりました。

学会運営に携わらせていただいた5年間で私に課



せられたことは、画像部会と計測部会を分科会名称に統一することと定款改正でした。

定款の改正につきましては、ちょうど、オウム真理教事件が発生したときで、公益法人に対する設立の許可指導監督を強化することを目的に閣議決定された「公益法人の設立許可及び指導監督基準とその運用指針」という通達が出されました。これに沿って検討した項目は、(1)代議員を審議機関としての「評議員」への変更。(2)役員と評議員の任期を1年から2年に変更。(3)4月1日～3月31日であった会計年度を3月1日～2月末に変更。などでありました。評議員制につきましては、当時50以上の学会を調査した結果、ほとんどの学会で評議員制度を採用していましたし、文部省(現・文部科学省)の指導も「評議員にしない」ということでした。だから、評議員制を採用し任期も1年から2年に、また、会計年度も3月1日から2月末に変更することとしました。当然のことではあります。定款を改正するには総会の承認が必要ですし、更に、所管官庁である文部省の認可も要りますから、簡単にはできません。松山から朝一便の飛行機に乗ってよく文部省に通いました。そして、京都経由で夜、松山に帰るといふ強行スケジュールで、よく身体が持ったものと感心しています。

西原：ということは、現在ある学会の体裁を整理し、組織を作り上げた方であるということですね。

大塚：話は変わりますが、学会誌の編集業務の外注も実現しましたが、これも大きな仕事だったと思います。

川上：当時の学会誌は、文字起こしや内容についてもすべて編集委員が目を通していましたから論文審査にも長い時間を要し、大変な作業に加えて、発送に至っては袋詰めとか、事務局員も全員が手伝ってやっていた。だから、1996年(平成8年)学会誌の予算削減や発刊の効率化、委員や事務局員の業務軽減を図るために外部委託をすることにしました。理事会

でかなりの議論となりましたが、強引に持っていかんとしょうがないから、とにかく外注することにしました。そしたら、作業効率がものすごく上がりましたし、編集委員の仕事も楽になったと思います。

西原：はい、現在は事務的な仕事がほとんどないので、純粋に編集業務ができています。逆に言うと、もっとがんばらないといけないうちかもしれません。

川上：それから、投稿論文数が年間100編以上となることを目標に、新しい区分(臨床技術)も作りました。臨床というのは、毎日の積み重ねが、いつの間にか、一つの技術としてまとまるものだと思います。ちょっとした工夫で患者さんの役に立つものであれば、そんなにオリジナリティに執着しなくても、それを論文化してほしい。その区分です。研究発表演題は年間約1,000題に近いぐらいありますよね。発表する会員は、何らかのメリットがあると思っているから発表しているに違いないのです。だから、「それをそのまま論文化しても良いよ」という考えでした。でも、結局100編には届きませんでした。

4. 開かれた学会

大塚：「学会は社会に対して開かれたものでなければならぬ」と発言されたのは、先生だったと記憶していますが……。

川上：学会が学術団体として対外的に認めてもらうためには「日本学術会議に登録されること」ということが重要でした。これは、学術団体としてのステータスを維持する目的です。速水昭雄元学会長のときに登録されたものですが、継続して登録されなければならない。更新するための手続きが大変でしたが、現在はどうなっていますか。

西原：本学会は「日本学術会議協力学術研究団体」として現在も登録されています。

川上：そもそも、法人というのは、社会的に認知された団体でしょ。学会としては学術研究が社会的に認知されないといけませんから、日本学術会議への登録は大事になります。また、「開かれた学会」として社会に貢献していかなければならない。その一環として大塚先生のご尽力により、文部省からの助成金を確保し一般市民を対象とした公開シンポジウムも実施してきました。これも、現在続いていますか。

大塚：現在もやっております。開かれた学会ということについても、先生が道を開かれたように記憶しています。

川上：開かれた学会を目指そうと思ったら、構成する理事の方々がいろいろな情報を持って理事会で発言して下さることが大事だろうと思います。一つの組織として、会務運営の最終責任は学会長にあること



は当然のことですが、理事さんにも相応の責任はあります。だから、責任の持てる理事さんを選ぶことが大切だろうと思います。

また、技術学会は、技師だけの学会ではありませんから、外に伸びようと思ったら、技師だけでなく他分野の研究者も多く入会することが必要不可欠な条件だろうと思います。そこで、最初に取り組んだことが、理事・役員に大学教員や企業研究者の方を登用することでした。企業研究者の方をお願いするにあたっては、まず、その企業に出向いて企業のトップの方をお願いし理解を求めるともしました。これらのことが、後々技師以外の大会長や女性大会長の誕生につながってきましたし、現在の小寺吉衛学会長の誕生につながってきたものと喜んでます。

そして、対外的に主張してきたことは、日本医学学術振興会(JMCP → JRC)での本学会の立場でした。川上個人の立場でなく、1万8千人会員の代表として出席しているのだとの強い思いで、常に対等の立場で発言するよう努めてきました。その代償として、登録費が医学放射線学会と同額となり参加会員にご負担をかけることになりましたが、一方で、お互いの発表会場への相互乗り入れが自由にできるメリットも生むことができました。当時のJRC理事長が順天堂大学の学長をなさっていた片山 仁先生であったことが幸いしていたように思っています。

1997年(平成9年)には学生会員制度を導入しました。目的は、卒業後に正会員として入会してもらうことと併せて、学術研究に対する興味を学生のときから持ってもらうことでした。しかし、卒業してから正会員になる割合がどうかというと、決して高いわけではありませんでした。これも就職した施設の環境が大きく影響を与えるのかもしれません。

大塚：学会員になるというのはあくまで個人の意思だから、学会そのものが魅力を持たないといけないうことですね。

5. 学会とは

西原：先生は学会に対してどのような考えをお持ちでしょうか。

川上：学会の将来構想については、これまで3度の学会将来構想委員会が設置され、それぞれ将来構想に関する答申が出されてきました。私が一番参考にしたのは、1974年(昭和49年)に出された答申で、「学会とは、個々の人間が自分独自で研究し、かつその問題を追究しようとしたとき、学問的障害にぶつかることが多い。そのようなとき、一つの研究グループを形成し、そのグループによって、お互いの矛盾点を解決し、研究活動をより高度に発展させ、お互いの間には何の拘束も、学歴的制限もなく誰が加入してもかまわない。しかし、この時点では、その研究グループの形のままでどうにもならなくなってくるだろう。そこで、学会という組織が作られる。」と学会の原点が述べられています。学会の原点は「内田ゼミ」「大塚ゼミ」にあると再認識させられました。

つまり、学会は、Fig. 1に示すように、学術研究を志す人たちの自由な加入のもと、各自が研究成果を自由に発表し議論する場であるとともに、それを円滑にするため、組織の民主的な運営が必要であるということです。将来構想答申を何度も読み返しながら「開かれた学会」を目指して与えられた任期の間、学会運営に携わってきました。

6. 今後の学会の方向性

西原：今後の学会に対して、どのような方向を目指してほしいとか、どのようになってもらいたいかなど、何か指針のようなものがありましたら教えてください。

川上：小寺学会長がご就任になり「開かれた学会」になってきたように思いますが、もう少し医師の入会を希望します。特に放射線科医ですね。技術学的なことだけでなく、臨床医学領域も取り入れてほしいという希望です。藤田 透前学会長のときに、大野和子先生に理事に就任していただき、より開かれた学会になったように思います。

それから、職場の上司の方へのお願いですが、若い人が学会で活躍できる職場環境を作ってやって欲しい。若い人は、未知なる可能性を秘めていますから。

西原：私も同感です。ただ、学会を理解していない上司や職場では、今回のこの記事についても目にする機会がないと感じます。そういった方々に対しても、先生のお気持ちを発信するためには、何か良い方法はないでしょうか。

川上：例えば、中国・四国部会では学術大会を放射線技師会と合同で開催していますね。組織的によいのか

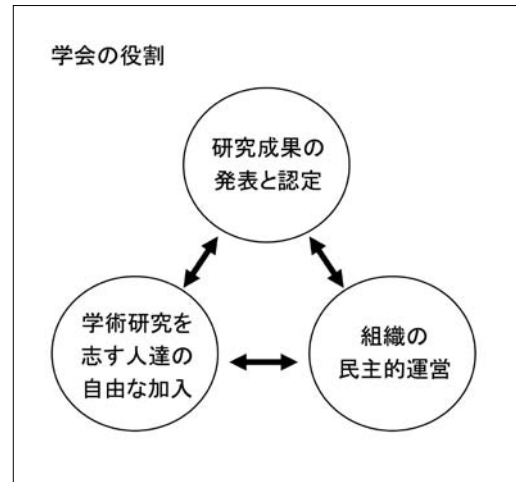


Fig. 1

どうかは分かりませんが、会員にとっては、どちらに入っていようが、学術大会に参加できるわけですから、技術学会に入らなくても技師会に入っていたら、上司が参加を勧めるかもしれません。中国・四国放射線医療技術フォーラム(CSFRT)は、将来の方向性を示しているようにも思います。参加することによって、学会に興味を持ってくれるかもしれませんから。

大塚：確かに、合同開催によって、演題も参加者も、かなり増えました。また大学病院などでは、技師も研究的な成果も求められてきているようですから、今後は、徐々にそういう方向に進むのではないかと感じています。

7. 会員に伝えたいこと

西原：最後に、先生、会員に伝えたいことがありましたら、どうぞ。

川上：先輩をよく見て！悪いところは真似しないように、真似してよいところだけを真似するように！

大塚：川上先生のおっしゃるとおりで、自分で判断できるようにするためには、自分で考える習慣を身につけることだと思います！

西原：自分で考える能力... どうやって培ったらよいでしょう。

川上：それは本人が持っている資質もあるだろうけど、やっぱり環境だろうと思うよ。だから、上司とか先輩は、環境作りをしてやってください。若い人には自由にさせてください。とにかく、好きにきなさいということ。「後は責任持つから」ということです。そういう環境で育てられたから、そうなのだけです。

西原：今日のインタビューは、環境で始まり、環境で終わるということですね。川上先生、お忙しいところお時間をいただきまして、本当にありがとうございました。大塚先生、一緒にインタビューをしていただき、感謝いたします。これで終わりとさせていただきます。

謝 辞

このたびのインタビューを実施するにあたって、写真撮影役に徹してくださった編集委員の高橋康幸先

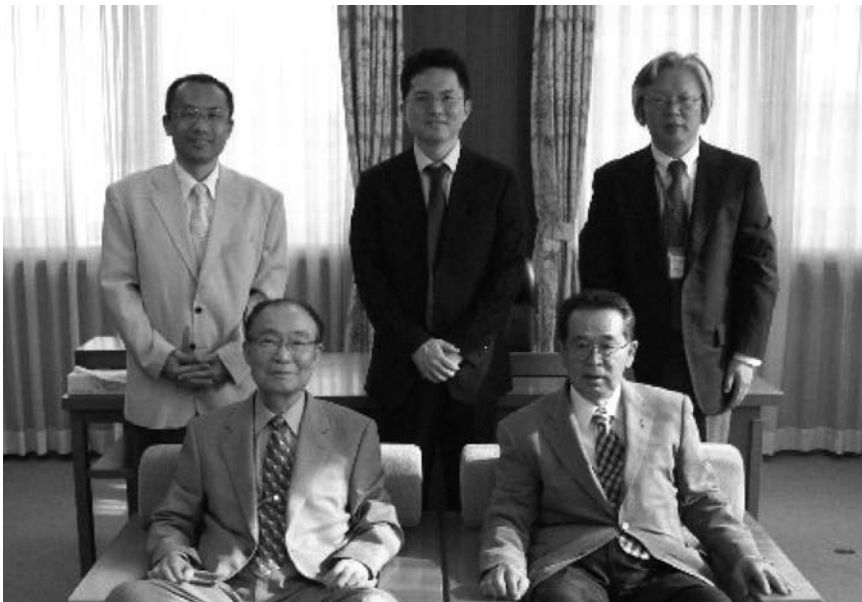
生に感謝いたします。また、会場等の段取りをお手伝いいただいた大石茂雄先生に深謝いたします。

川上壽昭先生—学会歴—

1961年	日本放射線技術学会入会 会員番号：8044
1978～1981年	愛媛支部 副支部長
1982～1991年	愛媛支部長
1985年	中国・四国部会 部会長
1986～1998年	日本放射線技術学会 理事
1987年	日本放射線技術学会 第16回秋季学術大会 大会長
1994～1995年	日本放射線技術学会 総務理事
1995～1998年	日本放射線技術学会 学会長
1994～1998年	日本ラジオロジー振興協会(JMCP) 副理事長
2006年～	日本放射線技術学会 名誉会員

【表彰】

2000年	学会功労賞
2001年	学会賞



前列左より大塚昭義先生，川上壽昭先生。
後列左より西原，高橋康幸先生，大石茂雄先生。